

うな点にまで論究しなければいけない。これが第三番目の課題である。

- ① 能力（学力）の多様化にどう対処するか。能力観や評価法の変革が必要である。
- ② 大学入試、高校入試のみで生徒を引っぱっていく現在のやり方に適応できない生徒が多くでる可能性がある。職業高校ではこの問題が大きくなっている。これは非常に困難な問題である。
- ③ 教科指導一本やりではいけなくなる。旧制中学旧制高校の感覚では全くだめである。教科指導の中での生活指導、生活指導の中での教科指導を考えざるを得ない。このような認識に立つならば、学校行事、生徒会活動、部活動の存在意義が大きくクローズアップされてくる。教科指導に重点が置かれている現在のカリキュラムの再検討が唱えられるのもこの理由からである。
- ④ 集団活動の育成が必要になる。集団活動にしらげを感じる集団をどう導くかが大きな問題である。
- ⑤ 生徒指導方法の問題。自主性の強い生徒と自主的活動の出来にくい生徒に対するきめ細い指導が必要になる。後者に対しては、ますます、自主性の育成を狙った指導が重要となる。

II 部活動・必修クラブと多層化

山田雄一・米田閔一

冒頭に私が部活動から連想する言葉をあげてみると「規律」「猛練習」「自主性」「仲間」「合宿」等が浮かぶ。果たして、この一年直接に部活動指導をして思うことはそれらにかなりの隔たりが感じられるのである。もちろん各部に規律も練習も仲間意識もあるだろう。しかし、私の高校時代のものとどこか違うような気がしてならない。

48年度必修クラブ（全クラと略称以下全クラと書く）成立以来、参加率は減少しているものの、中高で70%以上のものが部に登録しているのだから、数字的には部活動衰退は顕著ではない。が、50年度未から部活動衰退がとやかく話題になり、部活動のあり方、生徒の姿勢が問題にされている。その姿勢で最も問題になったのは、練習を勝手きままにさぼる態度である。生徒にしてみれば、部活動は自由な課外活動であり、さぼるという感覚はないのかもしれない。生徒自らが、練習日を、目標に向けての練習内容を決めているのだから我々がそれをさぼったと口を出すのもおかしいものである。部活動は、それを愛する者たちが、自主的に集まって仲間となり、自主的に目標に向かって取り組んでゆくべきものであるから。とにかく生徒が部活動をいかに捕えているかということ、実際に例をあげて考えていくことにする。

高校野球部は50年度1年生は2人しか入らなかった。そのうちの1人は技術的にはかなり良いものを持っているのだが、練習をさぼりがちで、夏の試合以来ぱったり練習にこなくなってしまった。やめるのならちゃんと退部届を出せと指導しても、けっしてそうしようとしな。そして本年度、部登録の際に呼び出して真意の程を聞いてみると「今はやらぬが、3年生が抜けたらやる」というのである。昨年、練習をきままにさぼり3年生とおりがうまうまかなくなったせいもあるだろう、そこにはもう学年を超越した仲間意識は見られない。又、高校女子バレー部でも、春の練習に全然参加せずに、顧問の先生から「やめろ」と断言されても、又本年部登録をして、たまた顔を出す生徒が数人いるそうである。彼らは部をやめてしまいたくはないのだ。しかし価値観として他のものを捨ててまで部に没頭しようとはしない。そういう生徒が今の部活動の主流をなしているのではないだろうか。もちろん野球部にしても、バレー部にしても、本当に部を愛し自ら進んで朝練習をする生徒も中にはいるのだが。そういう生徒を除いて主流の生徒は、やや過言ではあるが、部を一つの遊びの場として価値を見出しているようである。だからそれよりおもしろい遊びがあればそっちへいく。又、何か不都合なことがあるとその遊びを一時中止するのである。自分の好きな遊びだからけっして放棄はしたくないのだ。先日、卓球部とソフト部が交歓試合をしていたが、2年生でこんなに両部のものがいたのかとひどく驚かされた。

今度は文化系部に目を移してみよう。加入者の割合が運動部と比べて10分の1しかないとわかるように、例外を除いてほとんど活動が見られない。部の性格からして運動部よりも自主的活動が要求されるから、生徒はやっていけなくなってしまうのである。昨年で廃部となり、本年度は部のリストから消えた部の昨年の成立状況を例にあげよう。各部キャプテンに一年間の計画用紙を配布しようと呼び出したところ、その部だけどうしてもこない。名表で調べた登録には確かに数人いるので、顧問の先生に問い合わせたところ今年も顧問をひきうけた覚えはないとのこと。つまり生徒は部登録だけして、顧問の先生にも連絡していなかったのである。そこでその全員を呼び出して問いつめると、キャプテンもいないし、活動計画もない。もうやめるのかと聞けば、あやふやにやりたい意志を示していた。その場で責任者を決め、顧問の先生にお願いをさせて部として一応成立はしたが、案の定、ほとんど活動しないままに廃部となってしまった。が、彼らは又他の部に登録して、新しい遊びを始めている。

その姿勢は、全クラでもうかがえる。春の氣候のよい時、高3の者たちは時間を延長させてソフトボール

に熱中していた。が、受験が近づき、気候も寒くなると欠席が目立つ。そこには、受験勉強や寒さを克服する価値は見られないのか。

部活動にしても全クラにしても、そのサークルに登録した生徒が一つになれないのである。その価値を、遊びにおく生徒もいれば、体力づくりに、語らいの場に、そして心からそれを愛して、と様々である。だから仲間意識もうすべらなものとなり、その場限りのものになってしまう。サークル活動は学年も成績も超越して活動するところに意義があるのだが、一つのサークル内でも多層化した生徒間でのギャップからまとまりを欠き、ついには部活動全体の停滞化となっているようである。

が、とにかく高校70%中学80%の生徒が何らかの形で部活動をやろうとしているのだし、全クラに至っては全員が参加する正規時間内の活動であるのだから、散在している彼らを、興味を持続させながら正しい方向に導き、最終的に一つの輪の中に団結させてゆくことができたらと思うのである。

さてそれでは部活動と全クラとの関係はどのような相互の影響があるのだろうか。本校においては全クラを導入して今年で四年目を迎えている訳であるが、はたして全クラ自体本校のカリキュラムの中において高度な教育的側面としてどのような役割を果たしているのか、その測定はちょっとやさそとでは出来ないということが現在の四年目の状態であろう。しかしながら、全クラも五年目を過ぎるころとなればやはりその時点で一応それなりの評価をいろんな角度から資料を集めデータを分析してまとめてみることは大いに重要なことであろう。

全クラの部活動に対する影響というものは、極めてはっきりと数字顕著に出て来ている。それは言うまでもなく全クラの導入以来生徒の部活動登録人員の数が目に見えて減少していく傾向にあるということである。このことはいろんなことを意味していると考えられるが、まず第一にはっきりと言えることは、生徒の全クラに対する考え方がわれわれ教師が全クラに対して持っているイメージと少なからずずれがあるということであろう。その辺の考え方を両者共一致する方向へもっていかねば全クラを何年間やってもそれ相応の効果は得られないであろう。いやそればかりかかえってマイナスの面の方が大きいように思われてならないのである。第二に重大なことは何故全クラ導入以来部活動の衰退が顕著になって来たかということである。このことはわれわれ当研究グループの非常に大きな研究課題で二年前からこの問題と真向から取組み研究を進めて来ている訳だが深く研究が展じていけばいくほどこの重大さをいやというほど思い知らされるような気

がしているのが正直なところである。ただ単にこれは全クラが入ってきたからその結果として部活動の衰退があると言い切れないところにこの問題の難しいところがある。

それでは部活動の衰退に少なからず影響を及ぼしてきた全クラをただいたずらに白眼視するのではなく、もっともっと前向きな姿勢でこれからの部活動と全クラのあり方を考えていく決め手は何か、われわれはもっともっと地道にこの解決方法を求めて最大の努力をつづけて行かなければならないと考える。その一つの方策として部活動を活発化させる手段に全クラを逆に利用していくというやり方にもっと力を注いではどうだろうか。ただしこの方法をとっていかうとするならば今以上に部活動に対する教育的意義とか部活動の本来の目的とか言ったようなことをもっともっと研究しなければ全クラのねらいとするところの本質も根柢からくつがえってしまうことにもなりかねない。

Ⅲ 小文化祭・文化祭の報告

徳井輝雄

われわれは、すでに、学校行事に対する考え方や、文化祭における自主性を尊重した指導の具体例について報告した。^{①②}

ここでは、50年度の小文化祭(中学単独)、文化祭(中・高合同)について、中学の動きに重点をおきつつ、中・高併設校における学校行事のあり方、生徒会のあり方について考察をすすめる為の資料を提供する。この内容は、まさに多層化の中の生徒指導の具体例を示すことになる。

- ① 学校行事の批判的検討 本校研究紀要第18集(1972) P. 57
② 生徒の自主性を生かした生徒会指導の試み 本校研究紀要第20集(1975) P. 26

1) 小文化祭

1-1) 中学小文化祭の本校における由来と変遷のあらまし。

昭和22年 本中学校創立。学芸会が行われる。

昭和25年 本高校創立。中学独自の文化祭が行われる。

昭和37年 第一回中高合同の小文化祭が行われる。体育系部(当時クラブ)の他校(金大附高)との定期的対抗戦が行われるようになった。それにともない文化系部の交流も兼ねた。美術部や無線部等の交歓が行われた。

昭和46年 その対抗戦がなくなった。小文化祭の性格は、その後しだいに変化し、中学独自のものとなった。文化系部やクラスの劇等の発表が行われるようになる。秋の文化祭に